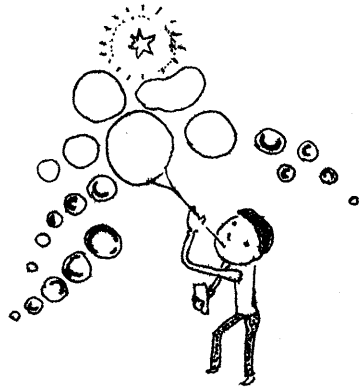


しゃぼん玉をめぐる対話

津守 真



ある日の保育のできごとをこまごまと述べることは読者には、多分面白くないことを承知しつつ、その日のことをまず記すことにしよう。

H子とA子とM先生がしゃぼん玉をしていた。H子は自分がしゃぼん玉を吹く傍で、他の子がしゃぼん玉をやるのはいやなのだ。M先生は言った。H子はA子のしゃぼん玉をとり上げようとしていたが、遂に、しゃぼん玉の液のはいった容器をひっくり返し、液を全部こぼして立ち去った。

そこにS夫がきてしゃぼん玉をやりはじめた。小さいのや大きいのが部屋から庭へと次々ととんでいった。彼は両手をふってとびながら、しゃぼん玉がとんでいくのを見た。しゃぼん玉が消えるまで見ている。自分の手でこわすのもある。面白くやっているなと思って私は見ていたが、間もなくS夫

は容器の液を全部こぼしてしまつた。

それからS夫はえのぐのびんを出してきて、私にふたをあけさせ、水道の水を強く出してえのぐを流出させた。流しにはいろいろな色水が渦を巻いてゆっくりと流れた。私はしばらく立ち去つて部屋にもどると、彼はビニールの水袋を床の上で踏みつけて破り、床はすでに水びたしになっていた。昨年は動きが少なかったS夫が、こんなに思い切つたことをしているのを見て、私は嬉しく思い、ひたすら床掃除に従事した。この水袋は、他の子どもが庭で水をつめて作り、先生に口をしぼってもらつていたのである。

この日のS夫の動きは、これまでの経過を知っている私にはとても面白く思えた。だが、この話だけでは、この子どもを知らない人には、ただそういう事実としてだけしかうつらないだろう。これを面白いと思うのは、以前には動きの少なかったS夫の過去と重ね合わせるからだろうか。それもあろうが、それだけの理由ではないように思えて、私は夕飯のとき妻にこの話をした。彼女は直ちに、それだけの理由であるはずはないと言つた。たしかにそうだ。保育のひとつまひとつまは、過去のことには知らなくとも、そのひとつの中に意味が含まれている。それなのに、ときどき、保育者にはそれが見えなくなってしまう。しゃぼん玉について、以前から思いをめぐらしていた妻と対話しながら、私はあの子の子についての経験といっしょに、この日のことを考えた。

しゃぼん玉を吹いてふくらますこと。しゃぼん玉は、息をするだけでふくらむ。息をするだけで、

何かをやったということが目に見えて、自己実現の感覚を得る。

しゃぼん玉は、見ているうちに消える。ふくらみ、ひとりでに消滅するものには、生命性が感じられる。

しゃぼん玉の液をこぼす。液をこぼすとしゃぼん玉はできなくなるから、大人は液をこぼさないように注意する。もつとふくらまそうとさそう。しかし、いろいろの子どもを見てみると、ふくらまずことによる自己実現を自ら断念し、それをこぼして使えなくする子どもが何人もいる。

H子は、隣に坐る子どもがしゃぼん玉をやりはじめたとき、他の子がしゃぼん玉の自己実現をするのを見るのはいやだった。他人の自己実現の傍で、自分がその影にされることを拒否した。S夫は、しゃぼん玉をもつとつづけさせようとする大人の期待に挑戦するかにように、液を全部こぼした。

えのぐを水で流出させる。えのぐは、筆につけて描くことを期待させる。えのぐをそのように使うのでなく、水で流出させてしまうとき、大人は思わず制止する。しかし、ある子どもたちは、大人の期待に沿ってえのぐで描くことに反逆する。ところが、その子どもたちも渦を巻く流れの色とりどりの美しさにひきつけられて、そこに魅せられてしまう。描くのととは別の美を発見している。

水袋を割ってあたりを水びたしにする。水袋は他の子がビニール袋に水を入れて、しゃぼん玉のようにふくらませたものだった。S夫はそれを足で踏みつけ、その結果流れ出てきた水で遊びはじめた。何もしないように見えたS夫が、床を水びたしにしたのである。私はこの子がこれをしたことをうれしく思った。

こう考えてくると、この日の保育のひとつまの中で、子どもたちは実に意味あることをしていたことがわかる。いきをするだけでしゃぼん玉をふくらませ、自己実現の感覚を体験している。また、液をこぼすことにより、大人が期待する方向の自己実現を拒否し、全く違うことに自分の世界を見出している子どもがいる。私は前者を実の自己実現、後者を虚の自己実現と呼んだ（拙著、「子どもの世界をどうみるか」NHKブックス）。大人の世界にも同様のことがある。世の中の役に立つ仕事をする傍に、役に立たない種類の活動が展開する。文学や思想はその類のことともいえよう。人々が集まる場で生じるこの力動性を無視したら、そこは、ある子どもたちには住み心地がよくとも、別の子どもたちには居心地のわるい場になるだろう。

この日の保育を、私が面白く思ったのは、生きた子どもの世界の意味が潜在的にふくまれているからであった。その意味をことばで示すことができるとき、その日の保育の当事者にとって面白いだけでなく、だれにとっても面白いものとなるだろう。子どもたちがすることは、その子たちにとって意味あることであるという認識に立ちもどり、そこから見直すとき、毎日の保育の現象は一回限りのものでありながら、私共は人間に共通の普遍的なものをそこに発見することができる。

（愛育養護学校）